

耳の 痛い ハナシ

子育てをしていると、子どもが興味を持っても、「まだ小学生だから早いかな」等とためらうこともあるだろう。しかし、年齢不相応でも、どんなやらせてみると可能性が広がることもある。

昨年訪問した琉球大学医学部のオープンキャンパスに、今年もお邪魔した。昨年、本誌でインタビューさせていただいた同医学科長の石田肇先生から、「今年はシミュレーションセンターというのができたから、ぜひ見に来てくださ

い」とお誘いを受けたからだ。行ってみて驚いた。これは医学教育が変わる、と直感した。

私が大学生だった頃はシミュレーターなどはなく、採血の練習では、先生の手本を見た後、いきなり友達同士で採血。下手な友達に

苦痛に耐えながら注射され、内出血なんてこともザラだった。今は、採血練習のための人形があるが、その程度はどの医大にもある。

ここ「おきなわクリニカルシミュレーションセンター」はそんなレベルではない。規模、シミュレーターの種類やカリキュラムの充実度は圧倒的に日本一だ。

コンピューターで人形のバイタル（心拍、呼吸、血圧、体温）の設定を変えることができ、正しく処置をすると改善し、間違えると悪化するという人形型高機能シミュレーターや、胃カメラや腹腔鏡下手術のシミュレーターもある。

私が見学したのは、受験を控えた高校生向けのセミナーだった。

阿部幸恵・医学部教授の指導の下、アンパンマンの歌（胸骨圧迫

のテンポのため）をかけながらの胸骨圧迫、AEDの使用練習の他、腹腔鏡下手術のシミュレーター練習も行われた。

腹腔鏡では胆嚢除去がミッシェンだったが、はじめてやる高校生たちは、操作中に間違えて肝臓を傷つけ、大出血もしばしば。「練習で良かったね」だ。

このシミュレーションセンターは、医学部の学生は当然利用できるが、学生のためだけではない。センター長の大屋祐輔・医学部教授は、「他県から見学者はたくさん来る。お金があれば似た施設は作れるだろう。ただ、それでは箱だけが残る。目的を明確にもって活用することが大事だ」と言い、地元の医師たちの医療技術向上のための施設だと位置づける。

文
石井至

第7回 どんどん、やらせる

医師は医師免許を取得し開業でもすると、新しい技術を身に付ける機会がなかなかない。ここは沖縄県の医療水準向上のためのまさにセンター（中心）なのだ。

逆に言えば、現役医師が技術を磨くための施設なのだから、そのくらいリアルで即戦力が身に付く施設ということだ。

琉球大学の医学部の学生は、本人次第では、毎日来て、繰り返し練習することができる。「まだ学生だから、腹腔鏡下手術なんて早い」などと思わずに、大学1年生から積極的に活用すると、卒業までには「プロ級」の腕並になる。

これは医学教育に限らない。興味があることなら、「まだ何歳だから」と思わずに、どんどんやらせるとよい。才能が開花する。

いいいいたる

1965年北海道札幌市生まれ。東京大学医学部卒（PhD）。当誌アドバイザー、関西大学経済政治研究所研究員（「子どもの安全とリスク・コミュニケーション」）、東京都市大学付属小学校学校評議員等を務める。『慶應幼稚園』（幻冬舎）など著書多数。

子どもの才能を引き出すeducation誌

ducare

日本経済新聞出版社 定価980円

デュケレ
Vol.13

保存版

学習習慣

を育む

本好きの子を育てる
読書サポート術

“ひとりで
できる子”
になる

家庭学習法

就職はどうなる？
結婚はできる？

2025年、
わが子は幸せ？

2025

学習ルール作りの極意
定着までのコーチング
日常会話で学力アップ
オススメ学習教材
etc.